

エネルギーを知る、考える、行動する —エネルギー講座の開講に寄せて

失われたエネルギーの安定供給

昨年3月11日の東日本大震災による東京電力福島第一原発の事故から2回目の夏を迎え、全国の原子力発電所が停止する事態に至っています。発電電力量の3割近くを担ってきた基幹電源を失ったことよって電力需給は逼迫し、代替電源となる天然ガス・石油などの火力発電の燃料費がかさむなど、長年にわたって暮らして産業を支えてきた日本の電力の安定供給は危機に瀕しています。

当面の課題である電力使用のピークを抑制するための節電対策や、計画停電、原子力発電所の再稼働の是非をめぐる議論に加えて将来のエネルギーのあり方をめぐる議論が交わされ、生活者も我が事として考えざるを得ない状況になってきました。

わかりやすさに潜む危うさ

震災後、地震・津波、原子力、放射線と次々に科学技術の専門家が

登場し、自らの見識をもとに災害・事故の原因や対策を説明しましたが、内容が専門的過ぎて難しく、国民全体が現状認識を共有できない状況が続いています。

原子力や再生可能エネルギー、化石燃料をどのように組み合わせる将来の電源を構成するかを検討している経済産業大臣の諮問機関である総合資源エネルギー調査会・基本問題委員会の議論も(ウェブサイトで27回に及ぶ会議の資料、議事録、録画面像のすべてが公開されているのですが)やはり一般の生活者が理解するには難しいと言えるでしょう。これまで電気について学ぶ機会は無いに等しく、私たちは磐石の供給体制のもと、空気のような存在としてしか電気を見てこなかったのです。私たちはついついわかりやすい二分論に与したり、%の数字に飛びついたりして、本質的な問題をなおざりにしてしまいがちです。

電源には異なる特性・得失・役割があり、それらを組み合わせた電源構成の選択肢にもそれぞれ特徴があります。迂遠なようですが、ひとつひとつを詳しく見た上で全体を見ないと判断を見誤ります。「真実は細部に宿る」のです。

とはいえ、「正確だけれど難解」な説明・議論をしてしまう専門家と、「詳しいことはわからないので簡単に」理解しようとする生活者の溝を埋

ように説明しようとする発信側のアクションが生まれます。

「エネルギー講座」の開講

リニューアル第1号となる本号より、連載企画の「エネルギー講座」暮らしとエネルギー」を始めます。

未曾有のエネルギー危機に直面し、国民的議論を経て新しい「エネルギー基本計画」を決めようとしている私たちは、その選択に必要な情報を手に入れ、理解し、正しい判断を下さなくてはなりません。また、資源に恵まれないわが国ではどの道を選んでも楽な道のはあり得ず、進みながら暮らし方、働き方、社会の仕組みを不断に見直して行く必要があります。

生活者の視点で研究するCELには、そのために必要な情報をやさしい言葉で正確に伝える責務があると考えています。「発信(したので伝わるだろう)主義」でなく、「到達(したかどうか)を常に確認する」主義に立ったコミュニケーションです。

「エネルギー講座」では、CELの研究員が社内外の専門家の支援を受けつつ、生活者の視点に立って、生活者が知っておくべきエネルギーの基本的な知識をわかりやすく紹介して行きます。これからは需要者と供給者が協力し、安全・安心の基盤の上に供給安定性、経済性、環境性が並び立つエネルギー供給構造をつくり上げ、賢くエネルギーを使って豊かな暮らしと社会を実現することを目指さなければなりません。本講座がそのための一助となることを心より祈っています。

めるのは容易ではありません。話が難し過ぎると言って専門家を責めたり、もっと勉強せよと生活者を叱咤するだけでは限界があります。必要なのは専門家と生活者を結び、間を取り持つてコミュニケーションを成立させる機能であり、プロセスです。

情報の送り手と受け手

—「わからない」から始めよう

この機能の担い手のひとつであるマスメディアは、限られた紙面・時間の中でシンプルにわかりやすく伝えようとするからでしょう。情報が抜け落ちたり、解釈を誤ったり、メッセージに引張られて論理が飛躍したりするケースが散見されます。調査・取材に基づく「事実」と、事実に基づいて独自の価値判断や意見を表明する「論評」とがきちんと区別されず、どちらかという事実が不足し、論評が過剰となっているのも気になるところです。

一方、生活者も実はわかっていないのに、問題を自身の身の丈(知識レベル)に合わせて単純化し、他人の意見やメディアの論調に頼って「わかった気になってしまおう」ことがあるのではないのでしょうか。これは自身の判断の誤りにとどまらず、他人にも影響を与え、世論全体を誤った方向へ導いてしまうおそれがあり、大変危険です。

大切なのは、わからないことを「わからない」と言い、「わかるような説明」を求めることです。聞き手が「わからない」と言っはじめて、わかる